

放射線技師教育と福島原発事故に関わって

福士 政広

Fukushi Masahiro

(首都大学東京健康福祉学部教授)



放射線と関わって、はや38年となりました。1977年に診療放射線技師の資格を取得し東京都立駒込病院放射線診療科アイソトープ室に配属され8年間核医学診療の臨床現場を経験し、その後診療放射線技師教育の場へ移り30年間にわたり診療放射線技師養成に関わり続けております。また、大学では若い学部生を対象に核医学検査技術学と放射線安全管理学を中心に講義、演習及び実験・実習、大学院生に対しては核医学物理学・保健物理学の講義と演習を担当しています。毎年夏休みには伊豆諸島の島へ学部生や大学院生を連れ、早朝から島全体の空間線量をレンタカー（測定器を積んで）でくまなく回る班と定点測定班及び土壌採取班に分かれ、伊豆大島から利島、新島、式根島、神津島、三宅島、八丈島、青ヶ島、父島及び母島と観測してきました。観測データをネタに民宿で焼酎をのみながら議論を戦わすのが楽しみとしております。御蔵島は船の着岸率が悪く、まだ実現しておりません。さらに、所属キャンパスにおける放射線管理の責任者である放射線取扱主任者を務め、学生及び教員の放射線障害予防に日々努めてきました。

この間、おおかた平穏な教育・研究生活を送ってきましたが、2011年3月11日に発生した東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故を契機として一変しました。連日マスコミに引っ張り出され、全く研究に費やす時間がなくなり、教育にも支障をきたす状況でした。いろいろな言われのない誹謗中傷を受け、傷心した時期もありました。多分、巻頭言を書かれた多くの識者の中にも多かったと想像に難くないと思います。その時に一貫して主張していたのは、パラケルススの「全てのものは毒である。毒でない物は存在しない。毒になるか薬になるかは正しい量であるかどうかで分かれる」という考えで、日頃から放射線影響に関しての例えとして授業で用いていました。

震災から4年が過ぎた今、冷静に福島第一原発事故に関する検証ができつつあります。新たな事実として、1～3号機、3つの原子炉が次々にメルトダウンした3月15日以後の放射性物質の大量放出の事実など、科学的な検証の下で全容が明らかとなってくることを期待しております。

ところで筆者が所属する首都大学東京荒川キャンパスは、都内で唯一残っている都電荒川線が近くを走っております。都電荒川線は大変趣があり、そのゆっくりとしたスピード感はやもすれば現代科学の激しすぎるスピード感に対してちょっと立ち止まって物事の原理原則を冷静にかつ丁寧に考えるのにちょうど良いスピード感を醸し出してくれる気がします。そのような都電荒川線に乗って三ノ輪駅から早稲田駅まで1時間ちょっと車窓を眺めながら福島第一原発事故の今後の放射線影響についてじっくりと考えてみてはいかがでしょうか。